



古い落ち葉、下草を粉碎鋤き込み放射能を土中に閉じ込める作業の実演

放射能と闘う有機農業
 昨年12月3日(土)創立40周年を迎えた日本有機農業研究会の開催する公開研究会「放射能汚染と有機農業」に学園花の村から藤本・伊藤の両名が参加した。原発事故時²、300³、400^{Bq}という汚染に見舞われた茨城県石岡市の魚住農場で、堆肥の主要材料源である落ち葉の放射能汚染にいかに対処し、今後の有機農業の安全安心を確保するのに成功したか等の活動報告が魚住道郎氏等からなされた。事故当時すでに発芽し汚染された落ち葉の放射能検査に始まり、それを土中に鋤込むことで新しい落ち葉の汚染を防ぐ対策が、地元生協の協力を得て着実に実行されたこと、および、雨中の耕作地見学では1mも掘り下げた畦に有機肥料をすき

こんでいる現場を紹介、「腐食・粘土・微生物の有機的複合体である有機肥料は放射性物質セシウムを吸収してくれる」と有機農業の効用を理論的に説き、自助努力、相互扶助の模範と感銘を呼んだ。(伊藤)
全報連北海道研修に出席
 ここ数年全国大会開催地の立候補がなく困っていた全報連(全国報徳連合会)では、23年度は北海道報徳社が主催する全道の研修会に客員参加することになり、花の村からは11月28、29日と藤本が出席した。北海道は農協や漁協に報徳運動が根付いていて、今回の研修会には農協や漁協、信用漁協連合会や農林中金からも出席していた。講師は神奈川県秦野市農協の前組合長である松下さんは「これからの農協は農家だけでなく准組合員も重視した地域共同体としての農協をめざすべきである」という大変説得力のある内容の講演をされ、聴衆に大きな感動を与えた。
 当日の夕刻、40年近く町長が無投票当選だった森町に誕生した佐藤新町長の町政変革の苦労話を伺い、翌日は森町町内にある道内唯一の地熱発電所と北海道最初の冷凍食品工場を見学した。(藤本)

書評 I

松井道夫

「木とつきあう智慧」

エルヴィン・トーマ 著 宮下智恵子訳



村上光照さんとお目にかかったときにいた人で、名刺交換をし、送っていただいた本である。

彼女が「木には不思議な性質があって、冬の新月の時期に木を切れば木に虫がつかない、暴れない……」と言ったときに「日本にも犯土(つち)というものがありますよ。」と知ったかぶりで言ったところ、「日本の犯土(つち)にはいい加減なところがある。わたしの訳した本を贈りますよ。」とのことで年末12月28日に届いた。夢中になって読んでいます。1回読み終わり、2回目じっくりと読んでいます。その興奮を抑えがたく新年の名刺交換で「今、こんな本を読んでいる。」と新月の木の話をしたら「そうだよ、それは僕たちの作っている果物でもそうだよ。キウイを採るときに月の暦を見ながらやっているよ、キウイなんか保管しなきゃいけないから、変な時期に採ると保存が効かなくなる。今年は実の熟れ具合より1週間ずらした。」と木の話だけではなく、果物へ、植物全般へ話が広がりそうで、興奮している。いつも芋の掘り時に苦労しているが、「月が欠けてきて新月に近いときに掘れば保存の効く芋がとれる」ということらしい。ドイツでは冬の特定期間に採った木に認証マークをつけている。木が暴れないように(反ったりしない)昔の人の知恵の発見となった本である。

書評 II

藤本 将

「怠れば廃る」

八幡正則著、南方新社刊



著者は鹿児島県信農連元常務で若いころ報徳思想を学び、それをよりどころに永年農協運動に従事、退職後は鹿児島大学で二宮尊徳の講座を持ち教鞭を振るわれた。

平成22年4月花の村を訪れ、二宮尊徳の信奉者である宮城正雄翁が開設した「倉馬の里」を見学している。この本は現在農協運動史上最大の危機に瀕しているといわれる農協の役職員リーダー向けに農協運動心得6か条という形でまとめられている。2012年は国連が定めた国際協同組合年で、戦後の協同組合はロッチデールの協同組合原則がベースになっているが、日本の農協はルーツが報徳社にある。儒教と仏教を加味した土着の思想を基本とする農協系統組織が科学技術優先の西欧思想やTPPをすすめるグローバリズムに対抗する勢力となることを期待するもので、ご一読をお勧めしたい。